編集後記

10数年振りにウエーバーの「職業としての学問」を読んだ。1919年、第一次大戦直後のミュンヘンでの講演記録である。そこでウエーバーは、職業として学問をする意味とその使命(Beruf)を語っている。あれから約一世紀後の現在の日本でもなおウエーバーの言葉は、職業として学問をする者が真摯に受け止めねばならないものである。否、大学・短大の生き残りを賭け右往左往するこの時代だからこそ、われわれはあらためて彼の言葉に正しく耳を傾けなければならないだろう。

神なき近代という時代において、学問はもはや「我々のなすべきこと」や「いかに生きるべきか」に直接的に答えることはできない。が、しかし「正しい問い方をするもの」に対しては何か貢献できるのではないかとウエーバーは考える。学問することは単なる知的興味ではなく、それぞれの人生・「生きるということ」から発せられた「問い」と関わっていることを強く示唆している。

正しく「問い」を立てたうえで、みずからが拠ってたつ究極の価値観と実際の行為とを明晰に思考し、その行為に責任をとること。この明晰さと責任を学問は教えることができるだろう。教師や研究者の使命はそこにあるとウエーバーは明言する。そして各人は「それぞれその人生をあやつっているデーモン」に従い、自分の仕事につき「日々の要求」に励むことがこの時代に生きる我々の宿命なのだと、ウエーバーは青年に呼びかける。

このウエーバーが大きな影響を受けたことが指摘されているニーチェもまた、人が教育者を必要とするのは「見ること、考えること、話すこと、書くこと」を学ばなくてはならないからであると書いている。それゆえ、教育者にはこうした能力が必要であり、この能力が教師に無いときには、学校は「上品さを失ったせかせかした忙しさ」に支配されることになると、19世紀末のドイツの上級学校を痛烈に批判している。神なき時代は苦難の時代だが、その宿命の道を、深い思考とともに歩こうという「強い意志」が、ニーチェやウエーバーの文章に読み取れる。

そしてその意志を「透明な意志」と書くのは、彼らとほぼ同時代を生きた宮沢賢治でもある。「われらに要るものは　銀河を包む透明な意志　巨きな力と　熱である」と書いた賢治は、比類ない宇宙的な構想力を掲げて、この時代の世界（事象・事実）から逃げることなくそれに向き合えと勧める。「世界に対する大なる祈願をまづ起こせ　強く正しく生活せよ　苦難を避けず直進せよ」と。嘗て賢治が教師の職を努めた花巻農業高校学校の正面玄関には、今、賢治の「精神歌」の最後の一節、「ワレラヒカリノ　ミチヲフム」が掲げられている。生徒たちは毎朝その言葉を浴びて登校している。

学ぶ者を惹きつける学校とは、もはや小手先の技法ではない、このような普遍的な宇宙と世界へと通じる高い精神をもった学校ではないのだろうか。われわれ教員もまた、そうした精神を目指して不断の知的訓練を怠ってはならないだろう。このささやかな論集がその訓練の成果であると信じたい。

2005年　紅葉浅き11月　水　谷　千鶴子